

論文 | Article

捕らわれの身になる求婚者  
- フェロー語バラッド 3 作品をめぐって -

Imprisoned Suitors: An Essay on Three Faroese Ballads

林 邦彦

HAYASHI Kunihiro

尚美学園大学

スポーツマネジメント学科 講師

Shobi University

2021 年 12 月

Dec.2021

## 捕らわれの身になる求婚者 - フェロー語バラッド3作品をめぐる -

### Imprisoned Suitors: An Essay on Three Faroese Ballads

林 邦彦

HAYASHI, Kunihiko

#### 〔抄 録〕

デンマーク自治領のフェロー諸島で多数伝承されるフェロー語のバラッド作品群に、「男性が他国の権力者の娘との結婚を望み、求婚に出向くも、現地で捕らわれの身となる。求婚相手（権力者の娘）が自らの父（権力者）に求婚者の解放を嘆願するも認められず、求婚者の兄弟が救援に駆けつける」との物語を伝える作品が複数見受けられる。これらのうち、アーサー王伝説等に取材したバラッド・サイクル『ヘリントの息子ウィヴィント』（CCF 108）を構成するサブ・バラッドの一つである『クヴィチルスプラング』と、このサイクルとは別の独立したバラッド『美丈夫フィンヌル』（CCF 26）の物語の類似はしばしば指摘されるが、本稿ではフェロー語バラッド作品で、これら二作品との物語の類似や影響関係についてはあまり指摘されない『コンスタンティノーブルのハラルドシェルドウル』（CCF 62）について、前出の二作品との内容上の比較を行い、この作品の位置づけや物語の由来をめぐる考察を試みたい。

#### キーワード

フェロー諸島、フェロー語、バラッド、『コンスタンティノーブルのハラルドシェルドウル』、『ヘリントの息子ウィヴィント』、『美丈夫フィンヌル』

#### 〔Abstract〕

Some of the Faroese ballads relate the story of a suitor who is imprisoned by the wooed maiden's father (the ruler of a certain district) and is later rescued by the wooer's brother after the maiden's father rejects her plea for his release such as *Kvikilsprang*, one of the sub-ballads comprising the ballad-cycle *Ívint Herintsson* (CCF 108), which contains several Arthurian materials, and an independent ballad *Finnur hin fríði* (CCF 26). This article focuses on the Faroese ballad *Haraldskjöldur á Miklagarði* (CCF 62), a ballad which relates a similar type of story to the two aforementioned ballads but has not been so often studied in relation to them, and compares it with them in order to reveal the ballad's position among the related works and the origin of its story.

## Keywords

Faroe Islands, Faroese, ballad, *Haraldskjöldur á Miklagarði*, *Ívint Herintsson*, *Finnur hin friði*

## 0. はじめに

デンマーク自治領のフェロー諸島で使用されているフェロー語では、多様な物語を伝える 200 篇以上の kvæði (クヴェアイ) と呼ばれるバラッド (物語歌) が伝承、採録されている。これらの作品群では、北欧神話やカール大帝の物語、アーサー王伝説など、様々な題材が扱われているが、これらの多数伝承されているフェロー語のバラッド作品群の中に、「求婚者の男性が他国の権力者の娘との結婚を望み、求婚に出向くも、現地で捕らわれの身になる。求婚相手 (権力者の娘) が自らの父 (権力者) に求婚者の解放を嘆願するも認められず、求婚者の兄弟の男性が現地へ救援に駆けつける」という要素を含む作品がいくつか見受けられる。その例としては、アーサー王伝説などに題材を採ったバラッド・サイクル『ヘリントの息子ウィヴィント』 (*Ívint Herintsson* (CCF 108))<sup>1)</sup> を構成するサブ・バラッドの一つである『クヴィチルスプラング』 (*Kvikilsprang*) や、このバラッド・サイクルとは別作品でありながら、物語の前半部分が『クヴィチルスプラング』の物語と類似した『美丈夫フィンヌル』 (*Finnur hin friði* (CCF 26))<sup>2)</sup> などが挙げられる。

この『美丈夫フィンヌル』の前半部分と『クヴィチルスプラング』の物語の類似性はしばしば先行研究でも指摘されており、両作品の物語の由来元として、あるアイスランドのサガ作品の存在が指摘されている。しかし、フェロー語バラッド作品には、これらの作品と物語上の類似が見られながらも、そうした物語上の類似やこれらの作品との影響関係について、先行研究ではそれほど指摘されていない作品が存在する。『コンスタンティノーブルのハラルドシェルドウル』 (*Haraldskjöldur á Miklagarði* (CCF 62))<sup>3)</sup> と呼ばれる作品である。

そこで本稿では、まず上記の『クヴィチルスプラング』と『美丈夫フィンヌル』について、それぞれ物語の概要その他の基本事項を確認した後、『コンスタンティノーブルのハラルドシェルドウル』を取り上げ、物語内容を確認したい。その上で、この作品について、『クヴィチルスプラング』、『美丈夫フィンヌル』との内容上の比較を行い、『コンスタンティノーブルのハラルドシェルドウル』の位置づけ、および物語の由来元をめぐる考察を試みたい。

## 1. 『クヴィチルスプラング』と『美丈夫フィンヌル』

### 1. 1. 『クヴィチルスプラング』

『クヴィチルスプラング』をサブ・バラッドに含むフェロー語のバラッド・サイクル『ヘリントの息子ウィヴィント』は 18 世紀後半から 19 世紀半ばにかけて、一般に A、B、C と呼ばれる 3 つのヴァージョンが採録されている。いずれのヴァージョンも複数のバラッドから構成されるバラッド・サイクルで、作品の大筋は 3 ヴァージョン間で共通している。バラッド・サイクル全体は、A ヴァージョンでは下記の計 5 つのバラッドから構成されている<sup>4)</sup>：

- I. *Jákimann kongur* 「ヨアチマン王」(80 スタンザ)
- II. *Kvikilsprang* 「クヴィチルスプラング」(60 スタンザ)
- III. *Ívints táttur* 「ウィヴィントのバラッド」(80 スタンザ)
- IV. *Galians táttur fyrri* 「ゲアリ안의バラッド第一部」(100 スタンザ)
- V. *Galians táttur seinni* 「ゲアリ안의バラッド第二部」(60 スタンザ)

バラッド・サイクル全体としてのこの作品の物語は、表題の人物ウィヴィント・ヘリントソン (Ívint Herintsson、ヘリントの息子ウィヴィント) の父ヘリント (Herint) の求婚話 (I)、ヘリントの息子ウィヴィントおよびウィヴィントの兄弟の冒険 (II、III)、さらにはウィヴィントの息子ゲアリアン (Galian) の冒険 (IV、V) によって構成されている<sup>5)</sup>。このウィヴィントの父ヘリントの求婚相手の兄が、アーサー王のことと考えられるハシュタン (Hartan) 王<sup>6)</sup>である。

この『ヘリントの息子ウィヴィント』を構成する5つのサブ・バラッドのうち、本稿で特に着目するのは第IIバラッドの『クヴィチルスプラング』である。Aバージョンでは、先行する第Iバラッド『ヨアチマン王』の末尾において、ヘリントと彼の求婚相手であるハシュタン王の妹が結ばれ、それに続く第IIバラッド『クヴィチルスプラング』の冒頭では、この二人の間に三人の息子が生まれ、それぞれウィヴィント (Ívint)、ヴィーフエール (Viðferð)、クヴィチルスプラング (Kvikilsprang) と名付けられたことが記される<sup>7)</sup>。そして、この『クヴィチルスプラング』ではそれに続き、以下の物語が語られる：

ヘリントの三男クヴィチルスプラングはジシュトランド (Girtland。ギリシャのことか?) へ赴くが、ジシュトランド王女と思しき人物のすぐ傍らの席に座ると、彼は当地の人間に引き倒されて後頭部を強打する。その後、クヴィチルスプラングとジシュトランド側との戦闘に発展した末、クヴィチルスプラングは捕らわれの身になる<sup>8)</sup>。

ジシュトランド王の娘ロウシンレイ (Rósinreyð) は父王に、クヴィチルスプラングを解放して自分に与えるよう懇願するが、父王は拒否。ロウシンレイはウィヴィントに救援に来てもらうべく、彼のもとへ使いの小姓を送る<sup>9)</sup>。事情を知ったウィヴィントはジシュトランドへ向かい、クヴィチルスプラングを救出する。

翌日、ウィヴィントとクヴィチルスプラングの二人はジシュトランド王やその軍勢と戦い、ウィヴィントはジシュトランド王を斃す。クヴィチルスプラングはロウシンレイと結ばれ、ジシュトランドの王位に就く。

以上がバラッド・サイクル『ヘリントの息子ウィヴィント』の第IIバラッド『クヴィチルスプラング』の物語である。なお、既述のように、この『クヴィチルスプラング』を含む『ヘリントの息子ウィヴィント』と呼ばれる作品については、それぞれABCと呼ばれる3バージョンが採録・伝承されており、これら3バージョンを比較すると、CバージョンだけがAB両バージョンとは異なる内容を伝えている箇所がサイクル全体にわたって多数確認でき、『クヴィチルスプラング』も例外ではない<sup>10)</sup>。

また、この『クヴィチルスプラング』については、ノルウェー語のバラッド作品の中に、物語内容や対応する登場人物の名前も類似した『クヴィーヒェスブラック』

(Kvikkjesprakk) と呼ばれる作品が伝承されている。このノルウェー語作品の内容をフェロー語の『クヴィチルスプラング』の3ヴァージョンと比較すると、ノルウェー語作品の物語には、フェロー語作品のどのヴァージョンにも見られない独自の要素がいくつか見られるが<sup>11)</sup>、上述の「フェロー語作品3ヴァージョンのうち、CヴァージョンだけがAB両ヴァージョンとは異なる」という箇所については、そのほとんどにおいて、Cヴァージョンとノルウェー語作品との間で内容上の共通性が見受けられる<sup>12)</sup>。

一方、この『クヴィチルスプラング』、および『クヴィーヒェスプラック』の物語は、フェロー語のバラッド作品群の中では、『美丈夫フィンヌル』(Finnur hin fríði (CCF 26)) と呼ばれる作品との類似が先行研究で指摘されている<sup>13)</sup>。

## 1. 2. 『美丈夫フィンヌル』

『美丈夫フィンヌル』と呼ばれるフェロー語バラッド作品は、A、B、Cと呼ばれる3つのヴァージョンが採録・伝承されており、物語の大筋は3ヴァージョン間で共通している。しかし、詳しくは後述するように、Cヴァージョンだけは、AB両ヴァージョンの約1.5倍の分量で、登場人物の言動などについて、AB両ヴァージョンにはない詳細な記述がなされた箇所が散見される。

『美丈夫フィンヌル』の物語内容は以下のとおりである：

ウップランド (Uppland、スウェーデンの一地方) の伯爵には二人の子息ホアルヴダン (Hálvdan) とフィンヌル (Finnur) がいた。フィンヌルは自分にふさわしい結婚相手について小姓に尋ねると、アイルランド王女を勧められる。フィンヌルは彼女に求婚するべく同地へ赴くが、アイルランド王から身分の差を理由に否定的な見解を示されると、戦闘に発展し、フィンヌルは捕らわれの身になる。

アイルランド王女インジビョルク (Ingibjörg) は父王に、フィンヌルを自分に与えるよう懇願するが、父王は拒む。インジビョルクはホアルヴダンに救援に来てもらうべく、彼のもとへ使いの小姓を送る。

事情を知ったホアルヴダンはアイルランドへ向かうと、城市に火を放ち、女性も子どもも構わず城内の者達を焼死させる。「私が何をしたのか」と問うアイルランド王に対し、ホアルヴダンは「私には弟がいるのを忘れか」と答える。「フィンヌルは獄にいる」と、アイルランド王はフィンヌルの生存を伝えるも、ホアルヴダンはアイルランド王を焼死するに任せ<sup>14)</sup>、フィンヌルを救出する。二人は揃ってインジビョルクのもとを訪れると、彼女からは「ヴァインラント<sup>15)</sup>の王達を斃して来れば、自分はその者と結婚する」と伝えられ、フィンヌルとホアルヴダンは同地へ向かう。

ヴァインラントではフィンヌルは二人の王を倒すが、空飛ぶ龍 (Cヴァージョンでは三人目の王が変身した姿であることが明示される) から吐かれた毒のために落命する。ホアルヴダンは三人目の王を斃し、アイルランドへ戻る。フィンヌルの死を知らされたインジビョルクは「フィンヌルが死んだ以上、自分は誰とも結婚はしない」と言い、ホアルヴダンの腕の中で眠るも、悲しみのあまり事切れる。ホアルヴダンはその後、悲しみのうちに生涯を送る。

以上が『美丈夫フィンヌル』の物語であるが、上述のように、本作のABC3バージョンのうち、CバージョンだけはAB両バージョンの約1.5倍の分量で、登場人物の言動などについて、AB両バージョンにはない詳細な記述が散見されるのが特徴である。

その一例として、物語後半の、ヴァインラントでフィンヌルが落命する戦闘の場面が挙げられる。Cバージョンでは、フィンヌルの命を奪うことになる毒を空中から吐く龍については、ヴァインラントの三人目の王が変身したものであることが記される（126-7スタンザ、548-9頁）。そして、この龍に変身した三人目の王が参戦し、多くの勇士達を斃すと、その様を目にしたフィンヌル自身も狼に変身し、さらに多くの者達を斃した旨が記される（128スタンザ、549頁）。しかし、このように登場人物がこの場面での戦闘にあたり、別の生き物に変身して戦った旨を記した記述はAB両バージョンには見られない（ただ、フィンヌルが狼に変身する様が記されるCバージョンにおいても、フィンヌルが龍の吐いた毒で落命する点はAB両バージョンと変わらない：131-2スタンザ、549頁）。

また、Cバージョンではフィンヌルが死に際に、自らの腕輪を取ってホアルヴダンに託し、インジビョルクの幸福を祈る旨の言付けを頼む（第133-4スタンザ、549頁）。そして実際、ホアルヴダンはアイルランドへ戻ると、インジビョルクにその腕輪を見せ、「彼女の幸福を祈る」とのフィンヌルの最後の言付けを伝える様が記される（第142-3スタンザ、549頁）。しかし、これらの場面の記述はいずれもAB両バージョンには見られない（もっとも、これらCバージョンにしか見られない記述については、当初はAB両バージョンにおいてもこれらの記述は存在し、それが伝承過程で脱落していったとも考えられるが、少なくとも現在、採録されているAB両バージョンには、これらの記述はいずれも存在しない）。

一方、BバージョンはAバージョンとは大きな違いはないが、Aバージョンではアイルランドと表記されている箇所の多くがBバージョンではジシュトランドと表記されている<sup>16)</sup>。アイルランドはフィンヌルが求婚に出向いて捕らわれの身になった地であり、『クヴィチルスプラング』においてクヴィチルスプラングが同様に求婚に赴いて捕らわれの身になったジシュトランドに対応する場所であることから、Bバージョンのこの点については『クヴィチルスプラング』の影響、ないしは伝承時に、『クヴィチルスプラング』との内容上の混同が起きた可能性が窺える。

そこで次に、この『クヴィチルスプラング』と『美丈夫フィンヌル』を比較し、改めてその類似点と相違点を確認したい。

### 1. 3. 『クヴィチルスプラング』と『美丈夫フィンヌル』の関係、および両作品の物語の由来元をめぐって

『美丈夫フィンヌル』の物語の前半部分は、

「兄弟のうちの一人が求婚に出向いた先で捕らわれの身となる。求婚相手の女性（同地の王女）は父王に対し、求婚者の解放を嘆願するも、認められず、彼女は求婚者の兄に救援を要請する。その求婚者の兄は現地へ赴き、弟を救出し、弟の求婚先の君主（求婚相手の父）は斃される」

という、『クヴィチルスプラング』と共通した内容を有している。細かに比較をすれば、『美丈夫フィンヌル』の前半部と『クヴィチルスプラング』の間には何点か相違は見つかり、それらの一部については本稿の後半で触れることになるが、『美丈夫フィンヌル』と『クヴィチルスプラング』、およびノルウェー語バラッドの『クヴィーヒェスブラック』との物語上の類似性は、既述のように先行研究において既に指摘されている<sup>17)</sup>。

しかし、バラッドの物語全体を比較した場合、『クヴィチルスプラング』やノルウェー語の『クヴィーヒェスブラック』が、主人公の求婚相手の父の死後、求婚者と求婚相手が結ばれるハッピーエンドで物語が終わるのに対し、『美丈夫フィンヌル』では『クヴィチルスプラング』に対応する前半部分の後、フィンヌル・ホアルヴダン兄弟のヴァインラントへの冒険とそこでのフィンヌルの落命、および彼の死を知らされたインジビョルクの死を伝える後半部が加わり、悲劇として物語が終わっている。

一方、『美丈夫フィンヌル』と『クヴィチルスプラング』の関連を指摘している先行研究のうち、Liestøl (1915: 177-9) では、フェロー語作品の『クヴィチルスプラング』と、『クヴィチルスプラング』と物語内容や対応する登場人物の名前が類似したノルウェー語の『クヴィーヒェスブラック』、そしてフェロー語の『美丈夫フィンヌル』という三作品の物語内容を比較した上で、その相違の仕方から、

①フェロー語の『クヴィチルスプラング』とノルウェー語の『クヴィーヒェスブラック』の二作品に、まず共通の元となる作品 y があり、この y と『美丈夫フィンヌル』の二作品にまた共通の元となる作品がある。

②その、y と『美丈夫フィンヌル』の共通の元となる作品は、アイスランドのサガ作品の中でも「古い時代のサガ」(fornaldarsögur) と呼ばれるジャンルに属する『ゴイトレークルの息子フロウルヴルのサガ』(Hrólf's saga Gautrekssonar。以下、『フロウルヴルのサガ』とする) の物語の一部分に由来するものなのではないか。

として、系統樹を示している<sup>18)</sup>。

しかし、上記の『美丈夫フィンヌル』における悲劇的な後半部は、フェロー語バラッドの作者が付け加えたものである可能性が高い。と言うのも、『クヴィチルスプラング』、『クヴィーヒェスブラック』、『美丈夫フィンヌル』という三作品に共通する物語の由来元である可能性が指摘されている『フロウルヴルのサガ』では、該当するエピソードの後の物語は、『美丈夫フィンヌル』に描かれているような悲劇的な成り行きにはならないからである<sup>19)</sup>。

ここまで、「求婚者の男性が他国の権力者の娘との結婚を望み、求婚に出向くも、現地で捕らわれの身になる。求婚相手(権力者の娘)が自らの父(権力者)に求婚者の解放を嘆願するも認められず、求婚者の兄弟の男性が現地へ救援に駆けつける」という要素を含むフェロー語のバラッド作品のうち、アーサー王伝説などに取材したバラッド・サイクル『ヘリントの息子ウィヴィント』を構成するサブ・バラッドの1つである『クヴィチルスプラング』と、『ヘリントの息子ウィヴィント』とは別に、物語の前半部分が『クヴィチルスプラング』の物語と類似している『美丈夫フィンヌル』と呼ばれる作品について、そ

の物語内容と両者の間の類似と相違について確認した。既述のように、両者を細かく比較すれば、物語上の細かな相違は何点か見つかるが、それらについては、差し当たりは深入りせず、ここで次に、ここまでに取り上げた作品に共通する要素のうち、「求婚者の男性が他国の権力者の娘との結婚を望み、求婚に出向くも、現地で捕らわれの身となる。求婚相手（権力者の娘）が自らの父（権力者）に求婚者の解放を嘆願するも認められず」というところまでは共通し、結末は『クヴィチルスプラング』や『クヴィーヒェスブラック』と同様、求婚者の男性が求婚相手と結ばれる形となる、別の作品を取り上げたい。既述のように、『コンスタンチノーブルのハラルドシェルドウル』（*Haraldskjöldur á Miklagarði*。以下、『ハラルドシェルドウル』とする）と呼ばれる作品である。

## 2. 『ハラルドシェルドウル』と関連作品

### 2. 1. 『ハラルドシェルドウル』の物語内容

この『ハラルドシェルドウル』と呼ばれる作品はAからFまでの6ヴァージョンが採録されているが、物語が部分的に欠落しているヴァージョンが多く、物語を比較的詳細に、一貫性のある形で伝えているのはAヴァージョンのみと言ってよい。特にEヴァージョンは物語の前半しか伝えておらず、Fヴァージョンは物語の冒頭近くの3スタンザを伝えるのみである（各ヴァージョンのスタンザ数は、A:165、B:122、C:104、D:100、E:65、F:3）。

B～Eヴァージョンの中には、一部、Aヴァージョンには見られない登場人物の言動を伝える記述が見られるものもあるが、基本的には、採録されているスタンザで伝えられている物語の内容にはヴァージョン間の相違はなく、本稿ではAヴァージョンの内容を本作の代表として扱う。Aヴァージョンで伝えられる『ハラルドシェルドウル』の物語は以下のとおりである：

主人公はコンスタンティノーブルを統治する王ハラルドシェルドウル（*Haraldskjöldur*）<sup>20)</sup>。彼の兄弟（恐らくは兄）はアイルランド王リングル（*Ringur*）、彼らの父はイングランド王ジェイティ（*Geyti*）といった。物語が始まると、他国の12人の王達が「ハラルドシェルドウルに匹敵するほどの人物はこの世におらず、彼からは大変な苦しみ、悲しみを負わされた」といって、ハラルドシェルドウルのもとへ軍勢を連れて攻撃に向かうも、あっけなく打ち負かされる様が描かれる（ハラルドシェルドウルは一人で1800人も斃したと記される）。

その後、ハラルドシェルドウルは自分にふさわしい結婚相手について小姓に尋ねると、フランスの皇帝の息女を勧められ、彼女に求婚するべく同地へ赴くが、フランスの皇帝からは反対され、戦闘に発展し、ハラルドシェルドウルは同地で捕らわれの身になる。

フランス皇帝の息女シルチアイク（*Silkieik*）は父帝に、ハラルドシェルドウルを自分に与えるよう懇願するが、父帝は拒む。しかし、ハラルドシェルドウルの親戚にあたる男性の協力により、ハラルドシェルドウルは獄から解放される。

ハラルドシェルドウルはしばらく婦人部屋で過ごすことになるが、この間にシルチアイクはハラルドシェルドウルの子を妊娠する。父帝はこの頃、一時的に国を留守にしていたが、ハラルドシェルドウルは、父帝の怒りを恐れたシルチアイクから国を出るよう



勧められ、一旦帰国する。

その後、国へ戻ってきた父帝はシルチアイクの様子から、彼女が一男性との間で子を身籠ったことを知り、彼女を火刑に処すべく、臣下に準備を進めさせる。しかし、近隣に住むヒルダ（Hilda）という人物が、シルチアイクの処刑を撤回するよう求め、皇帝が他の男性の夫人と褥を共にした事実を突きつけ、命を失うことになるかと脅すと（皇帝と同衾した女性の夫に復讐されるということか？）、皇帝はシルチアイクの処刑を取りやめる。

その後、改めてフランスへ求婚の旅に赴いたハラルドシェルドゥルは海上で、応援に来た兄のリングルと合流する。彼らはフランスに到着すると、兄弟揃って皇帝の御前へ参上し、ハラルドシェルドゥルは改めてシルチアイクへの求婚を申し出て、兄のリングルも弟に有利になるような言葉を述べる。皇帝は、これ以上傑出した人物に娘を嫁がせることはできないと言って、ハラルドシェルドゥルとシルチアイクの結婚を認める。同地で祝宴が行われた後、ハラルドシェルドゥルはシルチアイクを連れてコンスタンティノーブルへ、兄のリングルはアイルランドへ帰る。

このように、『ハラルドシェルドゥル』の物語は、全体としては、

「兄弟のうちの一人が求婚先で捕らわれの身となる。求婚相手（同地の皇女）が父帝に求婚者の解放を嘆願するも認められず、その後、求婚者の親族の男性のおかげで求婚者は解放。父帝は娘と求婚者の結婚を認めざるを得ない状況に追い込まれ、求婚者と求婚相手はめでたく結ばれる」

というもので、『クヴィチルスプラング』<sup>21)</sup>の物語と比べると、後半部分にやや相違があるものの、物語全体としての内容にはかなり類似が見られ、フェロー語の『美丈夫フィンヌル』に関しても、その前半部分については『クヴィチルスプラング』と同様、『ハラルドシェルドゥル』との類似が見られると言えよう。

しかし、『ハラルドシェルドゥル』と、これらフェロー語バラッド二作品との内容上の類似および相違については、先行研究では Liestøl (1915: 174) が「求婚者が求婚先で捕らわれの身となり、求婚相手の女性が父（国の統治者）に求婚者の解放を嘆願する」という点について、『クヴィチルスプラング』と『ハラルドシェルドゥル』の間に類似が見られると述べ、ゲルマン系北欧語圏のバラッドを物語タイプ別に分類した Jonsson, et al. (1978: 233-4)<sup>22)</sup> は、『クヴィチルスプラング』、『美丈夫フィンヌル』、『ハラルドシェルドゥル』の三作を「捕らわれの身になった求婚者の救出」(Rescue of captured suitor) を描いた作品として分類しているが、先行研究では、『ハラルドシェルドゥル』の物語全体の内容について『クヴィチルスプラング』や『美丈夫フィンヌル』との詳細な比較を行ったものや、これら二作品の物語との影響関係について考察したものは管見の限り見られない。

そこで以下、『ハラルドシェルドゥル』の内容について、これらフェロー語二作品との比較を行い、『ハラルドシェルドゥル』とこれら二作品との類似・相違のありようを明らかにし、『ハラルドシェルドゥル』が関連作品中に占める位置や、これら作品間の影響関

係をめぐる考察を試みたい。

## 2. 2. 『ハラルドシェルドウル』と『クヴィチルスプラング』・『美丈夫フィンヌル』との類似と相違

### 2. 2. 1. 物語全体の構造

まず、『ハラルドシェルドウル』の物語全体としての構造は、『美丈夫フィンヌル』よりも『クヴィチルスプラング』の方と類似性が見られると言えよう。『美丈夫フィンヌル』では『クヴィチルスプラング』に対応する前半部の後、フィンヌル、ホアルヴダン兄弟のヴァインラントへの冒険とそこでのフィンヌルの落命、および彼の死を知らされたインジビョルクの死を伝える後半部が加わった結果、物語が悲劇として終わっているが、この後半部の存在と悲劇的な結末は『クヴィチルスプラング』や『ハラルドシェルドウル』には見られず、この二作品は求婚者と求婚相手が結ばれるハッピーエンドの物語である。

### 2. 2. 2. 求婚者を捕らわれの身にした求婚相手の父の落命

一方、求婚者を捕らわれの身にした求婚相手の父が落命する点は『クヴィチルスプラング』のAC両ヴァージョンと『美丈夫フィンヌル』（全ヴァージョン）のみに共通して見られ、『ハラルドシェルドウル』には見られない。『クヴィチルスプラング』では戦闘において、ウィヴィントとクヴィチルスプラングの兄弟が協働して、求婚相手の父王（ジシュトランド王）側の軍勢を敗北させ、Aヴァージョンではウィヴィントが、Cヴァージョンでは、求婚者クヴィチルスプラング自らが父王を殺害するが（Cヴァージョンでは父王の命乞いにもかかわらず、クヴィチルスプラングは王を殺害する。Aヴァージョンでは父王による命乞いの場面を伝える記述はない）、Bヴァージョンでは父王の死までは描かれず、父王がクヴィチルスプラングに向かって命乞いをするところで物語が終わっている：

『クヴィチルスプラング』Aヴァージョン：

Tað var Ívint Herintsson / sínum svørði brá, / hann kleiv reystan Girtlands kong / sundur í lutir tvá.

ヘリントの息子ウィヴィントは彼の剣を抜き、豪胆なジシュトランド王を真っ二つに斬った。（第58スタンザ、206頁）

『クヴィチルスプラング』Bヴァージョン：

»Mín kæri Kvikil spraki, / gev mær nú grið!«・・・»Eg gevi tær jumfrú Rósin moy / og hált mitt ríki til handa.«

「親愛なるクヴィチル・スプレアチ（クヴィチルスプラング）よ、ここでわしの身の安全を保証してくれたまえ。」……「娘の乙女ロウシン（ロウシンレイ）とわしの国の半分はそなたのものだ。」（第30スタンザ3-4行、第31スタンザ3-4行、223頁）

『クヴィチルスプラング』Cヴァージョン：

»Mín kæri Kvikilbragd, / gev mær grið!・・・«・・・Tað var ungi Kvikilbragd / sínum svørði brá, / miðjan kleyv hann Girtlands kong / sundur í lutir tvá.

「親愛なるクヴィチルブラグドゥ（クヴィチルスプラング）よ、わしの身の安全を保証

してくれたまえ。……」……若きクヴィチルブラグドゥは彼の剣を抜き、ジシュトラン  
ト王を中央で真っ二つに斬った。(第 30 スタンザ 3-4 行、第 33 スタンザ、235 頁)

一方、『美丈夫フィンヌル』については、A ヴァージョンでは、捕らわれの身になった弟  
ウィヴィントの救援に来た兄ホアルヴダンが一人で、弟の求婚相手の父王を焼死させる：

『美丈夫フィンヌル』A ヴァージョン：

Hálvdan gekk frá strondum niðan, / eingin ið tað varir, / brendi bæði konur og börn, /  
tá ið hann kom at garði. Enntá mintist Hálvdan, / hvat verið hevði fyrr, / leggur eld í  
borgina / og stokkar fyrri dyr. Legði eld í borgina / og stokkar fyrri dyr, / brendi inni  
Írlands kong,

ホアルヴダンは浜辺から降りてきたが、誰も注意して見ている者はいなかった。彼は庭  
までやって来ると、女性も子どもも焼死させた。ホアルヴダンはその折、先に起きた  
ことを思い出し、城市に火を放ち、扉の前に門を掛けたのである<sup>23)</sup>。城市に火を放ち、  
扉の前に門を掛け、中にいたアイルランド王を焼死させた。(第 57-58 スタンザ、第  
59 スタンザ 1-3 行、537 頁)

その際、焼死する父王とホアルヴダンの間で次のようなやり取りが交わされる：

Svaraði tá hin Írlands kongur, / rópar hvølt og hátt: / »Hvat havi eg til sakar gjørt, /  
hví eri eg brendur í nátt?« Tí svaraði ríki Hálvdan, / talar so for seg: / »Tað visti tú,  
Írlands kongur, / bróður átti eg meg.« Tí svaraði Írlands kongur / av so tungari neyð:  
/ »Finnur er í myrkastovu, / hann er ikki deyður.«

その折、かのアイルランド王は大声を張り上げてこう叫んだ、「私が何をしたというのだ。  
なぜ夜中に火あぶりにされねばならないのだ。」すると権勢を誇るホアルヴダンはこう  
自己弁護した、「ご存じではありませんか、アイルランド王よ、私に弟がいたことを。」  
すると、アイルランド王は苦しみに苛まれながらこう答えた、「フィンヌルは獄にいる。  
彼は死んではいない。」(第 60-62 スタンザ、537 頁)

B ヴァージョンでは、

Loyniliga gekk frá strondum niðan, / eingin ið tað varði, / brendi inni bæði konur og  
börn, / í hvar hann kom at garði.

(ホアルヴダンは) こっそりと浜辺から降りてきたが、誰も注意して見ている者はいな  
かった。彼は庭までやって来ると、中にいる女性も子どもも焼死させた。(第 50 スタ  
ンザ、541 頁)

と記されるも、アイルランド王を焼死させた旨の記述はない。しかし、続く第 51-53 ス  
タンザ (542 頁) において、アイルランド王とホアルヴダンの間で、上記の A ヴァージ  
ョンの第 60-62 スタンザと同じ内容の会話が交わされることから、ホアルヴダンが王の

いる建物に火を放ち、王を焼死させたことが窺える。上記のように、A ヴァージョンでは 58-59 スタンザにおいて、ホアルヴダンが城市に火を放ち、扉の前に門を掛け、中にいたアイルランド王を焼死させたことが伝えられている。この A ヴァージョンの第 58-59 スタンザの内容に該当する記述が、B ヴァージョンでも第 50 スタンザの後に元々は存在しており、それが採録までの段階で脱落したという可能性も考えられよう。

一方、C ヴァージョンでは第 103 スタンザ（548 頁）において、上記の B ヴァージョン第 50 スタンザとほぼ同様の内容が記され、続く第 104-106 スタンザ（548 頁）では、同様に上記の A ヴァージョン第 60-62 スタンザ、B ヴァージョン第 51-53 スタンザと同じ内容の会話がアイルランド王とホアルヴダンの間で交わされるが、その後、第 107-108 スタンザにおいて、ホアルヴダン自らアイルランド王を真っ二つに斬殺したことが記される：

Tað var reystur Hálvdan sterki, / ið sínum svörði brá, / hann kleyv sjálvan Írlands kong  
/ sundur í lutir tvá.

勇猛な剛きホアルヴダンは剣を抜くと、アイルランド王本人を真っ二つに斬り裂いた。  
（第 107 スタンザ、548 頁）

Hann kleyv reystan Írlands kong / sundur í lutir tvá / síðan fullu partarnir / á  
brennandi bál.

彼は勇猛なアイルランド王を真っ二つに斬り裂いた。そして、斬り裂かれた体の部分部分は、燃え盛る炎の上へと落ちた。（第 108 スタンザ、548 頁）

このように、ヴァージョン間で細かな相違はあるものの、『美丈夫フィンヌル』では、求婚者を捕らわれの身にした求婚相手の父が落命する点はいずれのヴァージョンにも共通しており、落命させるのが求婚者の救援に駆け付けた兄の方である点では、『クヴィチルスプラング』の A ヴァージョンの方と共通している。

これに対し、『ハラルドシェルドウル』では、次項でも述べるように、求婚相手の父帝は、最終的には自らの娘と求婚者の結婚を認めることになり、作中で父帝が落命することはない。

## 2. 2. 3. 求婚相手の妊娠、および処刑の危機

『ハラルドシェルドウル』では、求婚者が求婚に出向いた先で捕らわれの身になった後、求婚者の兄弟が現地を訪れる前に、求婚者は別の親族の男性の協力によって解放され、求婚相手と同室で過ごした末に求婚相手が妊娠する：

Hann var sær í moynnasal / henda vetur í gamni, / tá varð svinna Silkieik, / keisarans  
dóttir, við barni.

彼（ハラルドシェルドウル）はこの冬は嬉々として婦人部屋で過ごし、皇帝の娘、聡明なるシルチアイクは子を身籠った。（A ヴァージョン、第 100 スタンザ、10 頁）

その後、求婚者は一旦同地を去り、求婚相手は父帝により、処刑されそうになるも、

Tú hefur sovið hjá konu kalls / og sagt honum ekki frá, / harfyri skalt tú, keisarin, / missa lív og ráð.

(ヒルダの発言) あなた様は、とある殿方の夫人のもとでお休みになり、その殿方にこの件について仰っていません。陛下、このためにあなた様はお命と統治者としてのお立場を失われますよ。(A ヴァージョン、第 119 スタンザ、11 頁)

と、父帝の弱みを握った別の協力者(ヒルダ)のおかげで命を救われ、父帝も娘と求婚者の結婚を認めざるを得なくなり、改めて同地を訪れた求婚者と求婚相手が結ばれるという経過を辿るが、こうした要素は『クヴィチルスプラング』や『美丈夫フィンヌル』には見られない。

## 2. 2. 4. 特定の物語要素や表現、言い回しの共通

一方、一部の物語要素や、物語中、個々の場面を描く際に用いられている表現や言い回しについては、以下のように『美丈夫フィンヌル』と『ハラルドシェルドウル』の間のみ、『クヴィチルスプラング』との間には見られない明確な類似性が確認できる：

I. 求婚者が求婚の旅に出る前に、小姓に自分の結婚相手の候補について尋ね、小姓から勧められた候補者のもとへ求婚に向かう点。

『美丈夫フィンヌル』A ヴァージョン：

Finnur er á leikvøllum, / hann talar við sínar dreingir: / »Hvar vitið tær mín javninga, / tað havi eg hugsað leingi?« Sveinar svara sínum halla; / »Hví spyrjið tær so, / best veitst tú við sjálvum tær, / hvar tín [stendur] hugur á? Vær kunnum ekki sannari / siga tær ífrá, / kongurin í Írlandi / so væna dóttur ár. Kongurin í Írlandi / eigur sær dóttur vísa, / kannst tú hana til ektar fá, / hon kann títt lív væl prísar. Írlands kongur dóttur eigur, / von er hon sum sól, / so er at líta á jomfrúit / sum droyrin drívur á snjó.« »Er hon seg so eigilig, / sum tær sigið frá, / biðja skal dóttur Írlands kong, / stendst hvat av ið má.«

フィンヌルは戦場で、臣下の勇士達にこう話した、「長い間考えていたのだが、私と釣り合う者はどこにいるか、そなたらは知っていないかね。」小姓達は彼らの主人にこう答えた、「なぜそのようなことをお尋ねになるのでしょうか。あなた様がお考えのことは、ご自身がいちばんよくご存じではありませんか。このことにつきましては、私どもはあなた様にこれ以上確かなことは申し上げられませんが、アイルランドの王には大層美しい姫君がおいででございます。アイルランド王には聡明な妹君がおられ、もしあなたが彼女とご結婚なされば、彼女はあなた様のご生涯を大層栄えあるものにしてくださいましょう。アイルランド王には姫君がおられますが、彼女は太陽のごとき麗しさで、その様は雪面に落ちた血のようでございます。」「彼女がもし、そなたらが言うように愛らしいのなら、どのような結果になろうと、アイルランド王女との結婚を

願い出る。」(第 4-9 スタンザ、534 頁)

『ハラルドシェルドウル』A ヴァージョン：

Haraldur situr í hásaeti, / hann talar við sínar dreingir: / »Hvar vitið tær mín javnlíka?  
/ Tað havi eg hugsað leingi.« Sveinur svarar sínum halla; / »Hví spyrjið tær so? / Best  
veitst tú við sjálvum tær, / hvar tín stár hugur á. Vær kunnum ikki sannari / siga tær  
ífrá, / keisarin í Frankaríki / væna dóttur ár. Keisarin í Frankaríki / eigur sær dóttur  
mæta, / bæði von og eigilig, / til góðs og landa at gæta.« »Er hon seg so eigilig, / sum  
tær sigið frá, / hagar streingi eg eiti mítt, / tað standist hvat av ið má.«

ハラルドウル（ハラルドシェルドウル）は玉座に座っていたが、臣下の勇士達にこう話した、「私と釣り合う者はどこにいるか、そなたらは知っていないかね。私は長い間考えていた。」小姓は彼の主人にこう答えた、「なぜそのようなことをお尋ねになるのでしょうか。あなた様がお考えのことは、ご自身がいちばんよくご存じではありませんか。このことにつきましては、私どもはあなた様にこれ以上確かなことは申し上げられませんが、フランスの皇帝には美しい姫君がおいででございます。フランスの皇帝には評判の妹君がおられます。麗しく愛らしいお方で、財と土地の面倒を見るお立場にあられます。」「彼女がもし、そなたらが言うように愛らしいのなら、どのような結果になろうと、私は厳粛な誓いを立てる。」(第 19-23 スタンザ、6 頁)

『美丈夫フィンヌル』の BC 両ヴァージョンにも同様の記述が存在し(B、第 3-8 スタンザ、539 頁；C、第 13-22 スタンザ、545 頁)、『ハラルドシェルドウル』では B～E の各ヴァージョンでも類似した記述が見られる(B、第 23-33 スタンザ、14-5 頁；C、第 13-20 スタンザ、20-1 頁；D、第 15-25 スタンザ、26 頁；E、第 17-25 スタンザ、31 頁)。この求婚相手の候補者をめぐるやり取りは、『クヴィチルスプラング』ではどのヴァージョンにも見られない<sup>24)</sup>。

Ⅱ. 求婚者が求婚先の国を訪れた際、現地の羊飼いが来訪者に気づき、同地の王あるいは皇帝に伝える。これは『美丈夫フィンヌル』の A ヴァージョンと『ハラルドシェルドウル』の大半のヴァージョンに共通して見られるが、『クヴィチルスプラング』ではどのヴァージョンにも見られない。以下に記すのは、『美丈夫フィンヌル』(A ヴァージョン)については、フィンヌルがアイルランド王女に求婚するべくアイルランドを訪れた場面、『ハラルドシェルドウル』については、ハラルドシェルドウルがフランス皇女に求婚するべく、物語中、初めてフランスを訪れた場面における記述である(A ヴァージョン)。

『美丈夫フィンヌル』A ヴァージョン：

Smaladrongur á heiði / goymir smalugeit, / hann sær skip eftir havi koma, / havn at  
vilia leita. Allar rekur hann smalurnar / saman á grønan vøll, / síðan akslar hann kápu  
blá, / hann gár í kongsins høll. »Eg eri mær á einum luti / vísari enn tær eruð øll, /  
eg sær skip eftir havi koma, / seglini hvít sum mjøll.« »Sært tú skip eftir havi koma, /  
seglini hvít sum lín, / vera man onkur høvdingurin / at biðja dóttur mín.«

羊飼いの少年が荒地で羊達の面倒を見ていたところ、船が航行して来て港を探しているのが目に入った。彼は羊達をみな緑の平原の方へ追いやり、それから青いコートを羽織ると王の広間へと向かった。「私はあることにおいては、皆様方よりもよく存じております。私は船が航行してくるのを目にいたしました。帆は淡雪のように白うございました。」「そなたが船が航行してくるのを見て、帆が絹のように白かったというのなら、それはどこかの首長が私の娘に求婚に来たのかも知れん。」（第 16-19 スタンザ、535 頁）

『ハラルドシェルドウル』A ヴァージョン：

Smaladrongur á heiði / goymir smalugeit, / hann sá skip eftir havi fara, / havn at vilia leita. Allar rekur hann smalur saman / upp á grønan vøll, / síðan akslar hann kápu blá, / hann gár í keisarans høll. Síðan akslar hann kápu blá, / hann gár í keisarans høll: / »Eg eri meg á einum luti / vísari, enn tær eruð øll. Eg eri meg á einum luti / vísari, enn tær eruð øll, / eg sær skip eftir havi fara, / seglini hvít sum mjøll.« »Sært tú skip eftir havi fara, / seglini hvít sum lín, / vera man onkur høvdingin / at biðja dóttur mín.«

羊飼いの少年が荒地で羊達の面倒を見ていたところ、船が航行しており、港を探しているのが目に入った。彼は羊達をみな緑の平原に追いやり、それから青いコートを羽織ると皇帝の広間へと向かった。それから彼は青いコートを羽織ると皇帝の広間へと向かった。「私はあることにおいては、皆様方よりもよく存じております。私はあることにおいては、皆様方よりもよく存じております。私は船が航行しているのを目にいたしました。帆は淡雪のように白うございました。」「そなたが船が航行してくるのを見て、帆が絹のように白かったというのなら、それはどこかの首長が私の娘に求婚に来たのかも知れん。」（第 38-42 スタンザ、7 頁）

『美丈夫フィンヌル』でも BC 両ヴァージョンには、この羊飼いの言動とそれに対する同地の王の対応を伝える記述は見られない。

一方、『ハラルドシェルドウル』の A ヴァージョンでは、ハラルドシェルドウルが最初にフランスを訪れた場面のみならず、物語の最後にハラルドシェルドウルが兄の同行を得て改めて求婚に訪れる箇所でも、第 135 ～ 138 スタンザにかけて、上記の第 38 ～ 41 スタンザと一言一句変わらぬ内容（12 頁）が記されているが、第 139 スタンザの記述は以下のように、フランス皇帝と思しき人物が、具体的にハラルドシェルドウルがやってきた可能性を指摘した内容となっている：

»Sært tú skip eftir havi fara, / seglini hvít sum lín, / vera man Haraldur á Miklagarði / at vitja brúður sín.«

「そなたが、船が航行してくるのを見て、帆が絹のように白かったというのなら、それはコンスタンティノーブルのハラルドウル（ハラルドシェルドウル）が彼の花嫁のもとを訪れに来たのかも知れん。」（第 139 スタンザ、12 頁）

なお、B ヴァージョンには、ハラルドシェルドウルが二度にわたってフランスを訪れた

場面では、いずれもこの表現は見られず、C ヴァージョンでは、二度目の箇所のみ、A ヴァージョンと基本的には同じ表現を用いた描写が存在し（C、第 68-72 スタンザ、23 頁）、この部分の最終スタンザ（第 72 スタンザ）は A ヴァージョンと同様、フランス皇帝と思しき人物が、ハラルドシェルドウルがやってきた可能性を指摘した内容の発言となっている<sup>25)</sup>。D ヴァージョンではハラルドシェルドウルが一度目にフランスを訪れた場面にはこの記述はなく、二度目の箇所までは物語が伝えられておらず、E ヴァージョンでは、一度目の場面では、A ヴァージョンとほぼ変わらない言い回しによる描写で表されている（E、第 32-7 スタンザ、32 頁）。なお、E ヴァージョンは二度目の箇所までは物語は伝えられていない。

Ⅲ. 求婚者が求婚相手の国に赴き、求婚相手の父王（父帝）の前で王女（皇女）への求婚を申し出たのを受け、父王（父帝）が求婚者に当人の名前や出身国について尋ね、それに対して求婚者が本人や親族の名前を答える。この場面の記述には『美丈夫フィンヌル』のすべてのヴァージョンと、『ハラルドシェルドウル』の大半のヴァージョンには共通して見られるが、『クヴィチルスプラング』にはいずれのヴァージョンにも見られない。

『美丈夫フィンヌル』A ヴァージョン：

Tí svaraði Írlands kongur, / gyrdur sat hann við brandi: / »Siga skalt tú eiti títt, / hvaðan tú ert av landi.« »Sjálvur eiti eg Finnur hin fríði, / Hálvdan er mín bróðir, / Úlvur jall er faðir mín, / frú Gortra er mín móðir.«

すると、アイルランド王はこう答えた。彼は剣を身に帯びていた。「そなたの名は何なのか、そなたはどこの国の出なのか、言ってもらおう。」「私自らは美丈夫フィンヌルと申します。私の兄はホアルヴダン、父はエウルヴル伯爵、母はゴシュトゥラ夫人と申します。」（第 28-9 スタンザ、535 頁）

『ハラルドシェルドウル』A ヴァージョン：

Tí svaraði keisarin, / gyrdur sat hann við brandi: / »Siga skalt tú eiti títt, / og hvaðan tú ert av landi.« »Eg kann ikki sannari / siga tær ifrá, / Geyti kongur av Onglandi / er sannur faðir vár. Sjálvur eiti eg Haraldskjöld, / væl kann beita brandi, / Ringur kongur er bróðir mín, / hann býr á Írlandi.«

すると、皇帝はこう答えた。彼は剣を身に帯びていた。「そなたの名は何なのか、そなたはどこの国の出なのか、言ってもらおう。」「私はこれ以上に真実に即したことは申し上げられません。私どもの実父はイングランド王のジェイティでございます。私自らはハラルドシェルドウルと申しまして、巧みに剣を操ることができる者でございます。私の兄はリングル王と申しまして、アイルランドに居住しております。」（第 55-7 スタンザ、8 頁）

なお、『美丈夫フィンヌル』BC 両ヴァージョンにも同様の記述が存在し（B：第 23-4 スタンザ、540 頁；C：50-1 スタンザ、546 頁）、『ハラルドシェルドウル』でも B、D、E 各ヴァージョンには同様の表現が存在する（B、第 49-51 スタンザ、16 頁；D、第



45-7 スタンザ、27 頁；E、46-9 スタンザ、32-3 頁）。

### 3. 結語

ここまで、アーサー王伝説に題材を取ったフェロー語のバラッド・サイクル『ヘリントの息子ウィヴィント』の第Ⅱバラッド『クヴィチルスプラング』や、同じくフェロー語バラッド作品の『美丈夫フィンヌル』とかなり類似した部分を含む物語が描かれていながら、これらの作品との比較や影響関係をめぐる考察がそれほどなされてこなかったフェロー語バラッド『ハラルドシェルドウル』について、物語内容を確認した上で、フェロー語作品の『クヴィチルスプラング』、および『美丈夫フィンヌル』と比較し、これらの作品との物語内容の類似点と相違点、および共通の言い回しの有無について明らかにすることを試みた。その結果、『ハラルドシェルドウル』は、求婚者が求婚相手と結ばれるハッピーエンドの物語である点では『クヴィチルスプラング』と共通性が見られるが、一部の物語要素や、個々の場面を描く際に用いられた表現や言い回しについては、『ハラルドシェルドウル』と『美丈夫フィンヌル』の間でのみ明確な類似性が見られるケースが複数存在することが確認できた。

この結果から、

①『美丈夫フィンヌル』と『ハラルドシェルドウル』は共通の祖先 x に由来。

② この x はさらに、フェロー語の『クヴィチルスプラング』とノルウェー語の『クヴィーヒェスプラック』の二作品の元となる作品 y と共通の祖先に由来<sup>26)</sup>。

そして、x の伝承過程において、

③ x に『美丈夫フィンヌル』の後半部分が付加されるケース

④ x の物語に『ハラルドシェルドウル』にしか見られない物語要素が付加されるケース

の二つがあらわれ、この③と④のケースがそれぞれ、今日の『美丈夫フィンヌル』および『ハラルドシェルドウル』に見られる形になったと考えられる。

今後はさらに、多様なモチーフや様々な物語展開を伴う関連作品へと射程を広げ、作品間での類似した表現の使用例の有無についても確認し、個々の作品の位置づけや物語の伝承の経緯について、より明らかにすることを目指したい。

### 註

<sup>1)</sup> 本稿では、フェロー語バラッド『ヘリントの息子ウィヴィント』のテキストは *Ívint Herintsson*. In: Djurhuus, N. (ed.) *Føroya Kvæði. Corpus Carminum Færoensium*, 5, 199-242. Copenhagen: Akademisk Forlag, 1968 を使用する。本稿中の同バラッドからの引用は、すべてこの版に拠る。なお、フェロー語のバラッド作品は、論文等で初出の際には、この *Føroya Kvæði. Corpus Carminum Færoensium* の版における掲載番号を作品タイトル

に付すのが通例である。*Føroya Kvæði* とはフェロー語のタイトルで「フェロー・バラッド（集成）」を意味し、*Corpus Carminum Færoensium*（『フェロー・バラッド集成』）とは、この版のラテン語名である。この版は、ラテン語名 *Corpus Carminum Færoensium* を構成する 3 語それぞれの頭文字を取って CCF との略称で呼ばれる。この *Føroya Kvæði. Corpus Carminum Færoensium* の版における、『ヘリントの息子ウィヴィント』（*Ívint Herintsson*）の採録番号は 108 番である。

<sup>2)</sup> 本稿では、フェロー語バラッド『美丈夫フィンヌル』のテキストは *Finnur hin fríði. In: Djurhuus, N. (ed.) Føroya Kvæði. Corpus Carminum Færoensium*, 1, 534-549. Copenhagen: Akademisk Forlag, 1951-63 を使用する。本稿中の同バラッドからの引用は、すべてこの版に拠るものである。

<sup>3)</sup> 本稿では、フェロー語バラッド『コンスタンティノーブルのハラルドシェルドウル』のテキストは *Haraldskjöldur á Miklagarði. In: Djurhuus, N. (ed.) Føroya Kvæði. Corpus Carminum Færoensium*, 3, 5-34. Copenhagen: Akademisk Forlag, 1945 を使用する。本稿中の同バラッドからの引用は、すべてこの版に拠るものである。

<sup>4)</sup> ここに記したのは A ヴァージョンにおけるバラッド・サイクルの構成である。A ヴァージョンにおける第Ⅲバラッドは他ヴァージョンには含まれず、A ヴァージョンにおける第Ⅳ・第Ⅴバラッドは他ヴァージョンでは第Ⅲバラッドとして 1 つのサブ・バラッドに統合され、C ヴァージョンではその第Ⅲバラッドがさらに（Ⅰ）、Ⅱ、Ⅲに分かれている（Ⅰについては実際の表記はなく、筆者による補足である）。

<sup>5)</sup> ここでのⅠ～Ⅴはサブ・バラッドの番号。

<sup>6)</sup> Hartan という名は A ヴァージョンにおける表記で、B、C では語頭の H のない Artan と表記される。他の登場人物についてもヴァージョンによって表記の異なる場合があるが、以下、本稿では登場人物名に関しては、原文の引用箇所を除き、原則として A ヴァージョンにおける表記を使用する。

<sup>7)</sup> C ヴァージョンではヘリントとハシュタン王の妹の間に三人の息子が生まれたことや、彼ら各々の名前などは、第Ⅰバラッドの末尾で簡潔に記される（233 頁）。一方、B ヴァージョンでは A ヴァージョンと同様、第Ⅰバラッド末尾にそのような記述はなく、一方、第Ⅱバラッドでは、冒頭の第 1 スタンザにおいて、「彼らの 3 人目の息子の名を教えよう。私は彼に匹敵する者はほとんど知らない。彼は兄弟の中でいちばん若く、クヴィチル・スプレアチ（クヴィチルスプラング）という名である（*Nevndur er teirra triði sonur, / fáan eg veit hans maka, / hann er yngstur av brøðrunum, / hann eitur kvikil spraki.*）（222 頁）」とあり、長男と次男については一切言及がなく、唐突に三男の名前だけが明かされて、第 2 スタンザでは、既に三男は冒険の行先に到着している（222 頁）。

<sup>8)</sup> C ヴァージョンではクヴィチルスプラングがジシュトランド王に対し、王女への求婚の意志を明確に表明する様が記されるが、その後、クヴィチルスプラングとジシュトランド側との戦闘に発展し、クヴィチルスプラングが捕らわれの身になる点は変わらない。

<sup>9)</sup> C ヴァージョンではジシュトランド王の娘が父王にクヴィチルスプラングを解放するよう要求する場面や彼女が小姓を使ってウィヴィントを呼びにやるとの記述はなく、ウィヴィントのもとへ向かう伝令については、その名前や社会的帰属、および彼がウィヴィントのもとへ向かうに至る経緯は一切明示されない。

<sup>10)</sup> 註 8、9、および Liestøl, Knut (1915) *Norske trollvisor og norrøne sogor*. Kristiania: Olaf Norlis Forlag, pp. 166, 168, 184-6、拙著『フェロー諸島のアーサー王物語 バラッド『ヘリントの息子ウィヴィント』をめぐって』(文化書房博文社、2022 年) 第三章・第五章を参照。

<sup>11)</sup> Liestøl (1915: 174)、および前掲拙著・第三章を参照。

<sup>12)</sup> 前掲拙著・第三章を参照。なお、『クヴィチルスプラング』が含まれるバラッド・サイクル『ヘリントの息子ウィヴィント』を構成するサブ・バラッドについては、第Ⅳバラッド『ゲアリ안의バラッド 第一部』と第Ⅴバラッド『ゲアリ안의バラッド 第二部』についても、この二つのバラッド分の内容に該当する物語を伝えるノルウェー語のバラッド作品として『エルニングの息子イーヴェン』(*Iven Erningsson*) と呼ばれる作品が採録されている。この、フェロー語作品の第Ⅳ・第Ⅴの 2 バラッド分の内容に関しても、フェロー語作品の 3 ヴァージョンとノルウェー語作品を比較すると、『クヴィチルスプラング』・『クヴィーヒェスブラック』のケースと同様、ノルウェー語作品の物語には、フェロー語作品のどのヴァージョンにも見られない独自の要素がいくつか見られるが、その一方で、フェロー語作品 3 ヴァージョンのうち、C ヴァージョンだけが AB 両ヴァージョンとは異なるという箇所が複数見受けられ、その多くの箇所において、C ヴァージョンとノルウェー語作品との間で内容上の共通性が見受けられる。詳しくは Liestøl (1915: 184-186) および前掲拙著・第五章を参照。

<sup>13)</sup> Liestøl (1915: 169-179) ; Kalinke, Marianne (1996) *Ívint Herintsson*. In Norris Lacy (ed.) *The New Arthurian Encyclopedia*. Updated Paperback Edition, 248-249. New York/London: Garland Publishing, Inc, p. 249; Driscoll, M. J. (2011) *Arthurian Ballads, rímur, Chapbooks and Folktales*. In: Marianne E. Kalinke (ed.) *The Arthur of the North. The Arthurian Legend in the Norse and Rus' Realms*, 168-195. Cardiff: University of Wales Press, p.177.

<sup>14)</sup> C ヴァージョンでは、救援に来たホアルヴダンが都市に火を放った上で、自ら父王を真つ二つに斬って殺害する (107-8 スタンザ、548 頁)。詳しくは本稿本文にて後述。

<sup>15)</sup> 原語の表記は Vinland。西暦 1000 年頃、ヴァイキングが北米地方 (ニューファンドランド島との説が有力) に開拓地を作り、「ヴィンランド」(Vinland) と名付け、その後一時期、この地に定住したとされる。インジビョルクの念頭にあるのはこの地のことか？

<sup>16)</sup> 第 5、第 6、第 7、第 15、第 20、第 52、第 53 の各スタンザ (539-40 頁、542 頁)。

<sup>17)</sup> Liestøl (1915: 169-179) など。詳しくは註 13 を参照。

<sup>18)</sup> 『フロウルヴルのサガ』の物語のうち、『クヴィチルスプラング』、『クヴィーヒェスブラック』、『美丈夫フィンヌル』の各バラッドで伝えられる物語の由来元となった可能性が指摘されている部分の物語は以下のとおりである：

スコットランド王子のアウスムンドゥル (Ásmundr) は、アイルランド王の娘インギビョルク (Ingibjörg) への求婚の意志を固めると、彼の乳兄弟で、スウェーデン王となっていたフロウルヴル (Hrólfur) が彼の求婚の旅に同行することになる。一行は多数の軍勢を連れ、途中立ち寄ったイングランドからも同行者を得て、アイルランドへ赴く。

一方、アイルランド王は魔術を駆使し、事前にフロウルヴルらの来訪とその動機につい

て情報を得ていた。アイルランドに到着したアウスムンドゥル、フロウルヴルら一行は、既に軍勢を待機させていたアイルランド王から求婚を断られ、即時帰国するよう言われるも、大規模な戦闘となり、両陣営に多数の犠牲者が出る。

フロウルヴル、アウスムンドゥルらの一行では、生き残ったのはこの二人とイングランドからの同行者一人の計三人のみであったが、彼ら三人は拘束され、地下深くまで掘られた溝に放り込まれる。アイルランド王は、その溝の中でフロウルヴルら三人を餓死させようと目論んだのである。しかし、先の戦闘でフロウルヴルらの活躍ぶりを見ていたアイルランド王女インギビョルクは、侍女を通じて、溝の中の三人に食料など必要なものを届けさせ、フロウルヴル、アウスムンドゥルらは溝の中で生き延びる。

その間、国で夫の帰りを待つフロウルヴルの妃は、夫らが助けを求めている夢を見る。フロウルヴルの留守中、スウェーデンを統治していたソーリル (Þórir) はアイルランドへ赴き、巨人に変身すると、アイルランド王らの居城の入り口を塞ぎ、王や臣下達は怯え続ける。

一方、王女インギビョルクと侍女は巨人の姿のソーリルと協働し、地中の溝からフロウルヴル、アウスムンドゥルら三人を救出する。その間に、フロウルヴルの妃や彼の兄弟のケティル (Ketill) もアイルランドに到着。アイルランド王は捕らえられ、王女インギビョルクをアウスムンドゥルに与えることを余儀なくされる。

フロウルヴル、アウスムンドゥルら一行はインギビョルクを連れて帰国。その後、アウスムンドゥルはスコットランドの王位を継ぎ、フロウルヴルとアウスムンドゥルは、生涯にわたって良好な関係であり続ける。フロウルヴルは名君との誉れのうちにスウェーデンの統治を続け、高齢で逝去する。

なお、『フロウルヴルのサガ』のテキストは、*Hrólfs saga Gautrekssonar*. In: Ferdinand Detter (ed.) *Zwei Fornardarsögur (Hrólfs saga Gautrekssonar und Ásmundarsaga Kappabana) nach Cod. Holm. 7, 4to*, pp. 3-78. Halle: Max Niemeyer. 1891 を使用。

<sup>19)</sup> 註 18 を参照。

<sup>20)</sup> 主人公のハラルドシェルドゥル (Haraldskjöldur) の名前は作中、しばしば「ハラルドゥル (Haraldur)」などとも記される。本稿では原文の引用箇所を除き、「ハラルドシェルドゥル」との表記を使用する。

<sup>21)</sup> 以下、特に断りがない限り、フェロー語作品の『クヴィチルスプラング』と、これと同じ題材を扱ったノルウェー語バラッドの『クヴィーヒェスブラック』は一つにまとめて扱い、フェロー語の『クヴィチルスプラング』の方に代表させる形を取る。

<sup>22)</sup> Jonsson, Bengt R., Svale Solheim, and Eva Danielson (1978) *The Types of the Scandinavian Medieval Ballad. A Descriptive Catalogue*. In Collaboration with Mortan Nolsøe and W. Edson Richmond. Instituttet for sammenlignende kulturforskning, Serie B: Skrifter, 59. Oslo/Bergen/Tromsø: Universitetsforlaget. この書籍は、デンマーク語、フェロー語、アイスランド語、ノルウェー語、スウェーデン語、ノーン語 (後述) というゲルマン系北欧語のバラッド作品について、その物語内容のタイプ別に分類しているものである。なお、ノーン語とは、8 世紀から 9 世紀にかけて、ブリテン島北部やその近辺の諸島に植民したノルウェー人ヴァイキングが当地にもたらした、その使用言語である古ノルド

語 (Old Norse) に由来する言語で、特にオークニー、シェットランド両諸島では比較的長く用いられ、19 世紀末に消滅したとされる。その消滅前に採録されたノーン語の言語資料の一つに、通例、*Hildina* との作品名で呼ばれるバラッドがあり、この作品も、この書籍がカバーする対象に含まれている (239 頁)。

<sup>23)</sup> ここに記されている、ホアルヴダンが焼死させた女性や子ども達は、彼が城市に火を放った結果、その中で焼死したものと考えられる。

<sup>24)</sup> ただし、『クヴィチルスプラング』を含む、アーサー王伝説を扱ったフェロー語のバラッド・サイクル『ヘリントの息子ウィヴィント』の第 1 バラッド『ヨアチマン王』では、A ヴァージョンにおいてのみ、物語の冒頭部において、ここで記したものと基本的に同じ表現を用いて、ヨアチマン王が求婚相手の候補者について臣下達とやり取りする様が描かれる (『ヨアチマン王』A ヴァージョン、第 7-15 スタンザ、199-200 頁)。

<sup>25)</sup> ただ、そのハラルドシェルドウルがやってきた可能性を指摘した部分は、C ヴァージョンでは *tað er hin ungi Haraldskjöld, / er komin at vitja vár.* (それはかの若きハラルドシェルド (ハラルドシェルドウル) が我々を訪れに來たのだ) とあり、この発言者が想定しているハラルドシェルドウルの来訪理由が A ヴァージョンのように「彼の花嫁のもとを訪れに」(*at vitja brúður sín*) ではなく、「我々を訪れに」(*at vitja vár*) となっている (第 72 スタンザ 3-4 行、23 頁)。

<sup>26)</sup> 本稿の本文にて既述のように、Liestøl (1915: 177-9) は、フェロー語作品の『クヴィチルスプラング』、『クヴィチルスプラング』と物語内容や対応する登場人物の名前も類似したノルウェー語の『クヴィーヒェスブラック』、そしてフェロー語の『美丈夫フィンヌル』の三作品の物語内容を比較した上で、その相違の仕方から、フェロー語の『クヴィチルスプラング』とノルウェー語の『クヴィーヒェスブラック』の二作品に、まず共通の元となる作品 *y* があり、この *y* と『美丈夫フィンヌル』の二作品にまた共通の元となる作品があり、その作品は、「古い時代のサガ」と呼ばれるジャンルに属するアイスランドのサガ作品『フロウルヴルのサガ』の物語の一部分に由来するものなのではないかとして、系統樹を示している。